

韓国語の使動態についての小考

金 仁和

キーワード：形態的使動、統辞的使動、語彙的使動、間接被動化の使役他動

1. 研究の目的と対象

文の構造を決定、変化させる要因として、態は韓日両言語において形態論的にも統辞論的にも重要な研究課題とされている。態は言語、研究者によりその規定範囲が異なるが、動作主体を主語、動作対象を対象語で表す「能動態」、動作対象を主語、動作主体を対象語で表す「受動態」、動作にとって第三者である指示者や許可者を主語、動作主体を対象語で表す「使動態」とする一般的な態の定義に従う¹。本稿では、能動態に基づいて派生したと見られる被動態と使動態のうち、使動態を対象とし日・韓両言語の相違点を究明する。

現在までの韓日両言語の使動態に対する対照研究は、主に意味機能の比較である。それに、日本語の使役表現を韓国語に対比させるという方向なので、韓国語の使動態の全般的な把握と日本語との対照は困難である。そこで、本稿では、韓国語の使動態を対象とし、その体系と特徴を日本語の使役表現と対照しながら考察する。

韓国語と日本語の使動態は使用範囲や意味機能の幅が違うので、両言語の使動態を対応させる時、問題点が生じる。

(1) -J AがBに服を着させる。²

-K1	A-가	B-에게	옷-을	입-히-다.
	A-ga	B-ege	os-+l	ip-hi-da.
	A-主格助詞	B-与格助詞	服-目的格助詞	語幹-使動補助語幹-語尾
-K2	A-가	B-에게	옷-을	입-게 하다.
	A-ga	B-ege	os-+l	ip-ke hada.
	A-主格助詞	B-与格助詞	服-目的格助詞	語幹-使動補助動詞句

(2) -J AがBに水を飲ませる。

-K	A-가	B-에게	물-을	마시-게 하다.
	A-ga	B-ege	mur-+l	masi-ge hada.
	A-主格助詞	B-与格助詞	水-目的格助詞	語幹-使動補助動詞句

¹ 国語学会(編)(1977)『国語学大辞典』東京堂出版、p.804 参照

² -Jは日本語の文、-Kは韓国の文を表す。韓国語の文のハイフンは、形態区分のため、筆者が便宜上付けたものである。

- (3) -J A가壁を高くする。
- | | | | |
|-----|--------|----------|--------------|
| -K1 | A-가 | 벽-을 | 높-히-다. |
| | A-ga | pyeog-+l | nop-hi-da. |
| | A-主格助詞 | 壁-目的格助詞 | 語幹-使動補助語幹-語尾 |
| -K2 | A-가 | 벽-을 | 높-게 하다. |
| | A-ga | pyeog-+l | nop-ge hada. |
| | A-主格助詞 | 壁-目的格助詞 | 語幹-使動補助動詞句 |

上の例文でわかるように、(1)では韓国語の2種類の使動態表現が見られる。また、(3)の日本語では使役表現は見られない。本研究は、このような日韓両言語の使動態の類似点と相違点を考察することを目的とする。特に、韓国語の使動態の特徴を中心に、その意味機能はもちろん形態論的な派生過程と統辞論的な構造を明確にする。

2. 韓国語の使動態の概要

大部分の形容詞と自動詞、一部の他動詞³は、一定の派生接辞の添加や補助用言との複合構造によって他動詞化され、使役の意味を遂行する、これを使動と呼ぶ。このうち能動の語幹に使動補助語幹(使動化接尾辞)이 i, 히 hi, 리 li/ri, 기 ki/gi, 우 u, 구 ku/gu, 추 chu が付いて使動化されることを形態的使動(または短形使動、非分離使動)といい、能動の語幹に-게, -도록 ke/ge, torok/dorok(ように)(副詞化語尾)+ 하-다 ha-da(する)(補助用言)が結合し形成された使動を統辞的使動(または長形使動、分離使動)という。例えば、自動詞 죽-다 cuk-ta⁴(死ぬ)の語幹 죽- chuk- にその音韻的環境に合わせて選択された使動化接尾辞 이 i が付くと、形態的使動 죽-이-다 cuk-i-da(殺す/死なせる)になる。それから、-게, -도록 하다 -ke/ge, -torok/dorok ha-da が結合されると、죽-게 하-다, 죽-도록 하-다 cuk-ke ha-da, cuk-torok ha-da(殺す/死なせる)のように、統辞的使動になる。

このように、韓国語の使動化には二つの装置が使われる。しかし、この二つの使動表現は若干意味の差を見せる。前章の例1)から見てみよう。

- (1) -J A가Bに服を着させる。
- | | | | | |
|-----|------|-------|-------|-------------|
| -K1 | A-가 | B-에게 | 옷-을 | 입-히-다. |
| | A-ga | B-ege | os-+l | ip-hi-da. |
| -K2 | A-가 | B-에게 | 옷-을 | 입-게 하다. |
| | A-ga | B-ege | os-+l | ip-ke hada. |

³ 本稿での自動詞、他動詞とは、目的語という文の項価を持っているか持っていないかによる分類である。

⁴ 基本形を表す終結語尾 -다 は、-da / -ta のように、前に来る語幹の音韻的な環境により二通りに発音する。

日本語の(1)-Jの意味は、①AはBが服を着ることを指示(許可)する②AはBが服を着る行動に直接的に参加して成功させるという二つの意味がある。それに対応する韓国語の文1)-K1の意味は日本語と同様二つの意味がある。しかし、(I)-K2には①の意味はあるが②の意味は薄い。これについては、4章で詳しく考察する。

使動が不可能なものには、一部の形容詞と自動詞、大部分の他動詞があるが、それらに一定の規則はない。また、形態的使動と統辞的使動を比較すると、形態的使動より統辞的使動の方がより広い範囲に適應される。

形態的使動が統辞的使動より適用範囲が狭いのは、その形成における制限が重要な原因である。例えば、하다 ha-da (する)と-하다 -ha-da (-する)動詞類(사랑-하-다 sarang-ha-da (愛する)、연구-하-다 yeongu-ha-da (研究する)など)、주-다 cu-da (与える)、받-다 pat-ta (受け取る)などの受与動詞、돕-다 top-ta (助ける)、얻-다 eot-ta (得る)などの受惠動詞、알-다 al-da (知る)、느끼-다 n+ggi-da (感じる)、바라-다 para-da (望む)などの心理経験動詞、만나-다 manna-da (会う)、뵈-다 tae-da (似る)などの対称動詞などは、形態的使動を作れない。また、語幹の末音が이 iで終わる動詞(만지-다 manji-da (触る)、지키-다 cikhi-da (守る)、던지-다 teonji-da (投げる)など)は、その末音が音韻的制約条件になり形態的な態が形成できない。そのため、統辞的な態の一部分は、形態的な態に置換が不可能である。

なお、韓国語の使動態には、上に述べた種類以外に語彙的使動というものがある。例えば、시키-다 sikhi-da (させる)という動詞の前に一定の名詞が結合されると、使動の意味を持つようになる。⁵

3. 韓国語の使動態についての論議

現在まで韓国語の態の研究は、多くなされている。その論点は大きく分けると以下の3点である。

① 使動態の範囲と分類⁶

一般的に使動態の種類としては、形態的使動(短形、非分離)、統辞的使動(長形、分離)、語彙的使動の三種類があげられる。それらのどこまでを使動態と考えるかが問題となるが、それは研究者によって意見が異なる。ある場合には形態的なものだけに限定され、ある場合には統辞的なものだけに限定される。また、形態的なものと統辞的なものを併せたもの

⁵ 語彙的使動の例は、次のように能動の意味の動詞に対する使動の意味を持つ動詞である。

能動		使動	
하-다	ha-da (する)	시키-다	sikhi-da (させる)
가-다	ka-da (行く)	보내-다	ponae-da (行かせる)
주-다	cu-da (くれる)	받-다	pad-da (もらう)
자라-다	cara-da (育つ)	키우-다	khiu-da (育てる)
배우-다	paeu-da (習う)	가르치-다	kar+chi-da (教える)

⁶ 이상익 Lee, Sang-eok (1970)、송석중 Song, Seok-cung (1984)、김문오 Kim, Moon-o (1996)、류성기 Ryu, Seong-gi (1998) 参照

だとする見解もあり、形態的、統辭的、語彙的なものの全てを態とみる見解もある。

次に、韓国語には二重態（二重被動、二重使動、被動使動、使動被動など）が存在するため、その分類も論争の対象となる。まず、態を構成する補助語幹は、形態的に類似したものが多く、音韻的制約による変形も多いので、使動の判定が困難である。また、態の二重化が起これば、意味的にも規定が曖昧になる。

② 形態的使動と統辭的使動⁷

形態的使動と統辭的使動との交替使用が可能かどうかを検討して、二つの使動が同一かどうかを考察した研究が多い。

③ 被動と使動の原理⁸

大半の従来の研究は、被動と使動を各々の原理で能動から派生される文法範疇として認めているが、変形生成文法理論を導入して、被動と使動を根本的に同一の原理で説明しようとする試みもある。

以上の三つの問題について本稿の立場は次の通りである。

まず、使動態の範囲については、形態的使動と統辭的使動に限定する。語彙的使動は韓国語の語彙体系の断片的特徴にすぎず文法が関与しているとみることが難しい。たとえば 교육-시키-다 kyoyuk-sikhi-da (教育させる)が 교육-하-다 kyoyuk-ha-da (教育する)の使動であれば、 교육-하-게 하-다 kyoyuk-ha-ke ha-da (教育するようにする)の意味でなければならないが、実際はむしろ 교육-받-게 하-다 kyoyuk-pat-ke ha-da (教育されるようにする)の意味である。このように、語彙的使動というものは、単純な語彙の対応に過ぎず、文法的に一定の意味規則を持った使動態でないことがわかる。

次に、形態的使動と統辭的使動の同一性に対しては、それぞれには適應の範囲の差、統辭構造の差、意味の差が見られるため、両者を異なったものとする。具体的には、統辭的使動は、形態的使動より、広い範囲の用言に適應できる。統辭構造から見ても、否定素の挿入、副詞類の修飾様相、補助用言との複合可否などで相当な範囲差を見せる。⁹ これは、統辭的使動が二つの用言の結合によるものであり、二つの用言の間にグラフィックポーズ（文字休止；分かち書き）を持っているので、二つの用言の分離性が高い結果と推測できる。しかし、この特徴は、意味の面では使役性を薄くしたり喪失させたりする原因にもなる。反面、形態的使動は、限定された範囲の用言にしか適用できなくその数が少ないが、慣用的な使用により本来の使役以外の意味が添加されることが多い。

⁷ 形態的使動と統辭的使動が同義であると主張する論文としては、이정민 Lee, Ceong-min (1973)、양인석 Yang, In-seok (1974,1976)、양동휘 Yang, Dong-hui (1976)、손호민 Son, Ho-min (1978) などがあり、一方意味が異なると主張する論文としては、柴谷 (1973)、송석중 Song, Seok-jung (1978a,1978b,1980)、이기동 Lee, Ki-dong (1976,1978)、김차균 Kim, Cha-gyun (1980) などがある。

⁸ 이정민 Lee, Coeng-min (1973)、박양규 Park, Yang-gyu (1978)、양동휘 Yang, Dong-hui (1979)、김한곤 Kim, Han-gon (1982)、이남순 Lee, Nam-soon (1984)、김문오 Kim, Moon-o (1982) 参照

⁹ 송석중 Song, Seok-cung (1980)、pp.49~66 参照

最後に、韓国語の被動化の特徴は、印欧語の中立被動とは異なり非行動性、脱行動性、状況依存性にあり、使動詞の特徴は、使動主と被使動主が同一の指示対象ではなく、使動主が被使動行為を誘発できる能力を持っていることである。つまり、被動化と使動化は、双方とも能動表現に替われば、二つの主語－述語の構造を持つようになるが、被動主（被動文の主語）が行動力を持っていない反面、被使動主（使動文の目的語）は行動力を持つ。そのため、文の項価的に両者は異なる数を持つようになり、その形成も異なる原理で説明しなければならない。

4. 使動態における韓日両言語の対照

韓国語の使動態と日本語の使役表現との対照において、論議されるべき点がいくつかあるが、ここでは形態的使動と統辞的使動、間接被動と使動の2点に絞って考察していく。

4.1 形態的使動と統辞的使動

韓国語の使動態には形態的なものと統辞的なものがある。これらは構造的、意味的に同一のものもあるが、多くの場合差異を見せている。この形態的使動と統辞的使動を日本語にどのように関連させるかを日本語での「他動詞化」と言われる文法現象と対照させて考察しよう。

まず、日本語で「自動詞」－「他動詞」のペアを形成する動詞リストを作り¹⁰、各ペアの派生関係を表1のように整理した。対象となっている動詞の主語が、ペアをなす動詞のそれぞれにおいて主体格¹¹として成立する意味構造になる。そして、各ペアの派生方向は、統辞構造上項価が少ない方を基準にした¹²。更に、それらの使役表現を比較させた。それから、意味関係を基準とし、韓国語と対比した。

【表1】自動詞－他動詞－使動表現

自動詞	他動詞	使動表現
上がる or+da 오르-다	上げる ol-li-da ¹³ 올-리-다	上がらせる or+ge ha-da ¹⁴ 오르-게 하-다

¹⁰ 日本語の自動詞化・他動詞化の分類体系とは少し異なる内容である。これらは韓日両言語の対照という観点から、意味関係を重視して再検討したものである。奥津（1967）参照

¹¹ 主体格というのは、述語の行為内容に行動力を持った主語を意味する。二つの行為様相（使動主－使動行為、被使動主－被使動行為）が行われる使動化が成立できるためには、ペアの両動詞が主体各主語を持たなければならない。

¹² 例えば、主体各主語を持つ「隠れる」と「隠す」を例とし、その派生方向を考えてみる。「隠れる」は「子供が隠れる」のように<主語－述語>の基本統辞構造が必要だが、「隠す」は「私は子供を隠す」のように<主語－目的語－述語>の基本統辞構造が必要となる。意味構造で派生の方向が決められない場合、動詞の統辞構造上項価が少ない方を基準と設定することができる。

¹³ 올-리-다 ol-li-da は、오르-리-다 or+ri-da になるはずのものが、発音のため、変化したものである。

¹⁴ -게 하-다 ke/ge ha-da は、-도록 하-다 -torok/-dorok ha-da と、ほとんどの場合、同じ意味で交替使用が出来るので、表1では代表として-게 하-다 -ke/-ge ha-da を出した。

移る om-da 옮-다	移す om-gi-da 옮-기-다	うつらせる om-ge ha-da 옮-게 하-다
動く umjigi-da 움직이-다	動かす umjigi- -da ¹⁵ 움직이- -다	うごかせる umjigi-ge ha-da 움직이-게 하-다
起きる ggae-da 깨-다	起こす ggae-u-da 깨-우-다	起きさせる ggae-ge ha-da 깨-게 하-다
隠れる sum-da 숨-다	隠す sum-gi-da 숨-기-다	隠れさせる sum-ge ha-da 숨-게 하-다
育つ khi+da 크-다	育てる khi-u-da ¹⁶ 키-우-다	育てせる khi+ge ha-da 크-게 하-다
立つ seo-da 서-다	立てる se-u-da ¹⁷ 세-우-다	立たせる seo-ge ha-da 서-게 하-다
建つ seo-da 서-다	建てる se-u-da 세-우-다	建たせる seo-ge ha-da 서-게 하-다
付く put-ta 붙-다	付ける puch-i-da ¹⁸ 붙-이-다	付かせる put-ke ha-da 붙-게 하-다
流れる h+r+da 흐르-다	流す h+l-li-da 흘-리-다	流れさせる h+r+-ke ha-da 흐르-게 하-다
並ぶ n+reoseo-da 늘어서-다	並べる n+reose-u-da 늘어세-우-다	並ばせる n+reoseo-ke ha-da 늘어서-게 하-다
残る nam-da 남-다	残す nam-gi-da 남-기-다	残させる nam-ge ha-da 남-게 하-다
乗る tha-da 타-다	乗せる thae-u-da ¹⁹ 태-우-다	乗らせる tha-ge ha-da 타-게 하-다
曲がる kup-ta 굽-다	曲げる kup-hi-da 굽-히-다	曲がらせる kup-ke ha-da 굽-게 하-다
渡る keonneo-da 건너-다	渡す keonne-da ²⁰ 건네-다	渡らせる keonneo-ge ha-da 건너-게 하-다

¹⁵ 움직이-다 umjigi- -da は、움직이-이-다 umjigi-i-da になるはずのものが、発音上、縮略されたものである。

¹⁶ 키-우-다 khi-u-da は、크-우-다 khi-u-da になるはずのものが、発音のため、変化したものである。

¹⁷ 세-우-다 se-u-da は、서-우-다 soe-u-da になるはずのものが、発音のため、変化したものである。

¹⁸ 붙-이-다 puch-i-da は、発音規則上、puch-i-da と発音する。

¹⁹ 태-우-다 thae-u-da は、타-우-다 tha-u-da になるはずのものが、発音のため、変化したものである。

²⁰ 건네-다 keonne-da は、건너-이-다 keonneo-i-da になるはずのものが、発音のため、変化したものである。

表1は、意味関係を基準とし、日本語の他動詞化と使役表現を韓国語に比較したものである。表1からわかるように、日本語の他動詞化による他動詞の大部分が韓国語の形態的使動に該当し、日本語の使役表現は韓国語の統辞的使動に該当する。

しかし、韓国語の形態的使動と統辞的使動の意味的な差は、日本語の他動詞化と使役表現の意味的な差からも分かるように、被使動主(目的語)の行動に対する意志や能力がどの程度介入するかによるものである。

- (4) -J1 Aが物を2階に上げる。
 -J2 AがBを2階に上げる。
 -K1 A-가 물건-을 2층-에 올-리-다.
 A-ga mulgeon-+l ich+ng-e ol-li-da.
 A-主格助詞 物-目的格助詞 2階-場所格助詞 語幹-使動補助語幹-語尾
 -K2 A-가 B-를 2층-에 올-리-다.
 A-ga B-+l ich+ng-e ol-li-da.
 A-主格助詞 物-目的格助詞 2階-場所格助詞 語幹-使動補助語幹-語尾
- (5) -J1 Aが物を2階に上がらせる。
 -J2 AがBを2階に上がらせる。
 -K1 A-가 물건-을 2층-에 오르-게 하-다.
 A-ga mulgeon-+l ich+ng-e or+ge ha-da.
 A-主格助詞 物-目的格助詞 2階-場所格助詞 語幹-使動補助動詞句
 -K2 A-가 B-를 2층-에 오르-게 하-다.
 A-ga B-+l ich+ng-e or+ge ha-da.
 A-主格助詞 物-目的格助詞 2階-場所格助詞 語幹-使動補助動詞句

例文(4)と(5)のように、被使動主を物と人間に分けて比較すると、分かりやすい。例文(4)では、被使動主が行動に対する意志や能力がない人間の場合、不自然になる。反面、例文(5)では、被使動主が行動に対する意志や能力がない物の場合、もっと不自然になり、非文になる。即ち、日本語の他動詞化した他動詞と韓国語の形態的使動での被使動主は、行動に対する意志や能力がないか、あってもそれを使えない状態にある。また、日本語の使役表現と韓国語の統辞的使動での被使動主は、被使動行為に参加できる行動力を持っている。

4.2 間接被動と使動

韓国語では一般的に被動化の結果、自動詞化されるが、間接被動化の場合には他動詞化されることもある。韓国語のこういった間接被動化を日本語と対照させながら、その内容と問題点を考察していく。

韓国語の間接被動化とは、ある他動詞は被動化の結果、被動詞になるが、その被動詞が意味の差がない自動詞文と他動詞文、両方を作る場合がある。その場合、自動詞文は被動の構造を他動詞文は使動の構造を持つ。このように、同じ形態で同じ意味を持つ自動詞と他動詞に転換可能な被動を間接被動という。

被動の結果、自動詞化、他動詞化の両方が可能な動詞の例は次の通りである。

【表 2】 韓国語の間接被動²¹

能動形	被動形	
	自動詞化	他動詞化
뜯-다 tt+t-ta Vstm-Vp はがす	뜯-기-다 tt+ki-da Vstm-PSstm-Vp はがされる	
반창고-를 뜯-다 N-ACCp Vstm-Vp ばんそうこうをはがす	반창고-가 뜯-기-다 N-NOMP Vstm-PSstm-Vp ばんそうこうがはがされる	반창고-를 뜯-기-다 N-ACCp Vstm-PSstm-Vp ばんそうこうをはがされる
밟-다 pap-ta Vstm-Vp 踏む	밟-히-다 pap-hi-da Vstm-PSstm-Vp 踏まれる	
발-을 밟-다 N-ACCp Vstm-Vp 足を踏む	발-이 밟-히-다 N-NOMP Vstm-PSstm-Vp 足が踏まれる	발-을 밟-히-다 N-ACCp Vstm-PSstm-Vp 足を踏まれる
베-다 pe-da Vstm-Vp 切る	베-이-다 pe-i-da Vstm-PSstm-Vp 切れる	
손-을 베-다 N-ACCp Vstm-Vp 手を切る	손-이 베-이-다 N-NOMP Vstm-PSstm-Vp 手が切れる	손-을 베-이-다 N-ACCp Vstm-PSstm-Vp 手を切れる

²¹ 表 2 に使用されている文法記号は次のような内容である。
 Vstm：動詞の語幹、Vp：動詞の語尾、PSstm：被動補助語幹、
 N：名詞、ACCp：対格助詞、NOMP：主格助詞

<p>빼앗-다 ppaeat-ta Vstm-Vp 奪う</p>	<p>빼앗-기-다 ppaeat-ki-da Vstm-PSstm-Vp 奪われる</p>
<p>돈-을 빼앗-다 N-ACCp Vstm-Vp お金を奪う</p>	<p>돈-이 빼앗-기-다 돈-을 빼앗-기-다 N-NOMP Vstm-PSstm-Vp N-ACCp Vstm-PSstm-Vp お金が奪われる お金を奪われる</p>
<p>찌르-다 ccir+-da Vstm-Vp 刺す</p>	<p>찢-리-다²² ccil-li-da Vstm-PSstm-Vp 刺される</p>
<p>배-를 찌르-다 N-ACCp Vstm-Vp おなかを刺す</p>	<p>배-가 찢-리-다 배-를 찢-리-다 N-NOMP Vstm-PSstm-Vp N-ACCp Vstm-PSstm-Vp おなかが刺される おなかを刺される</p>
<p>차-다 cha-da Vstm-Vp 蹴る</p>	<p>채-이-다²³ chae-i-da Vstm-PSstm-Vp 蹴られる</p>
<p>다리-를 차-다 N-ACCp Vstm-Vp 足を蹴る</p>	<p>다리-가 채-이-다 다리-를 채-이-다 N-NOMP Vstm-PSstm-Vp N-ACCp Vstm-PSstm-Vp 足が蹴られる 足を蹴られる</p>
<p>책잡-다 chaekcap-ta Vstm-Vp けなす</p>	<p>책잡-히-다 chaekcap-hi-da Vstm-PSstm-Vp けなされる</p>
<p>얼굴-을 책잡-다 N-ACCp Vstm-Vp 顔をけなす</p>	<p>얼굴-이 책잡-히-다 얼굴-을 책잡-히-다 N-NOMP Vstm-PSstm-Vp N-ACCp Vstm-PSstm-Vp 顔がけなされる 顔をけなされる</p>

²² 찢-리-다 ccil-li-da は、찌르-리-다 ccir+-li-da になるはずのものが、発音のため、変化したものである。

²³ 채-이-다 chae-i-da は、차-이-다 cha-i-da になるはずのものが、発音のため、変化したものである。

털-다 theol-da Vstm-Vp すっかり盗む	털-리-다 theol-li-da Vstm-PSstm-Vp すっかり盗まれる
집-을 털-다 N-ACCp Vstm-Vp 家をすっかり盗む	집-이 털-리-다 집-을 털-리-다 N-NOMP Vstm-PSstm-Vp N-ACCp Vstm-PSstm-Vp 家がすっかり盗まれる 家をすっかり盗まれる
핥-다 hal-da Vstm-Vp なめる	핥-이-다 halt-I-da Vstm-PSstm-Vp なめられる
접시-를 핥-다 N-ACCp Vstm-Vp 皿をなめる	접시-가 핥-이-다 접시-를 핥-이-다 N-NOMP Vstm-PSstm-Vp N-ACCp Vstm-PSstm-Vp 皿がなめられる 皿をなめられる

上の表2で分かるように、このうち間接被動による他動詞化は、使動と関連づけることができる。即ち、間接被動後、自動詞化された場合は被動の意味が強いが、他動詞化された場合は表3に見られるように、文の構造と意味が使動と同じになる。

【表3】 韓国語の間接被動の他動詞化と使動

能動形	
A-가 (B-의) 발-을 밟-다 A가 (Bの) 足を 踏む	
間接被動の他動詞形	使動形
(B-의) 발-을 A-에게 밟-히-다 (Bの) 足を Aに 踏まれる	(C-가) A-에게 (B의) 발-을 밟-히-다 (C가) Aに (Bの) 足を 踏ませる (C-가) A-에게 (B의) 발-을 밟-게 하-다 (C가) Aに (Bの) 足を 踏ませる

表3のように、間接被動の他動詞化は一見使動と同じのように見える。特に韓国語の研究では、これらを同一化する場合が多い。しかし、本稿では、間接被動の他動詞化を使役他動と称し、使動とは異なったものとして扱うことにする。

このようにみる根拠は、表3でも分かるように、Cの介入である。使役他動は「Aの意志や状況がAにBの足を踏むようにしている」が、使動は「足を踏む行為に対する意志と行動

力を持っている第3者、CがAにBの足を踏むようにさせている」。韓国語では、第3者の介入を、より明確に見せる語彙群がある。韓国語の音声象徴語の一部、心覚と視覚の動作象徴語と聴覚象徴語は、能動、被動、使動の形態が同一である。

【表4】音声象徴語の能動、被動、使動

能動形	
A-가 (A-의) 눈-을 깜빡이-다 A-ga (A-e) nun-+l kkambbagi-da A가 (Aの) 目を瞬かす	
使役他動形	使動形
(A-의) 눈-을 깜빡이- -다 (A-e) nun-+l kkambbagi- -da (Aの) 目を瞬かされる	(B-가) A-에게 (A-의) 눈-을 깜빡이- -다 (B-ga) A-ege (A-e) nun-+l kkambbagi- -da (B가) Aに (Aの) 目を瞬かせる (B-가) A-에게 (A-의) 눈-을 깜빡이-게 하-다 (B-ga) A-ege (A-e) nun-+l kkambbagi-ge ha-da (B가) Aに (Aの) 目を瞬かせる

表4で分かるように、対象となる音声象徴語は、使役他動において主体格と対格が同一指示物、または、離れない所有関係 (inalienable possession) にあるため、表示されない。つまり、A-拭推 (Aに) が必須的に省略される。しかし、使動では、使動主と主体が一致しないし、両方とも行為に対する意志や行動力を持つため、表示できる。

間接被動の他動詞化文 (使役他動) においても、主体格と対格 (被動主) の関係が音声象徴語の使役他動と同様であるため、厳密に言えば、使役行為という機能を備えられなくなり、結局、意味的に被動文と同じになる。それ故、使役他動は、統辞構造や意味において使動とは異なる、別の派生範疇といえる。

5. まとめと今後の課題

本稿は、韓国語の使動態の概要と論議点を、日本語との対照を通して、考察・解決することを目的とする。

そのため、まず、韓国語の使動態の特徴を論議したいいくつかの論文を紹介し、本稿での立場を明らかにする。特に、韓国語の使動態を日本語に受容する時の問題である、形態的使動と統辞的使動、間接被動化による使役他動などについて対照・分析する。その結果は、次の2点に要約できる。

第一に、韓国語の「形態的使動」と「統辞的使動」は、日本語の「他動詞化」と「使役表現」と関連させて考察した。日本語の他動詞化は、使役の意味を誘発する場合が多いため、

意味関係により、韓国語の使動態と比較した。その結果、韓国語の形態的使動は日本語の「他動詞化」に該当し、韓国語の統辞的使動は日本語の助動詞セル・サセルが接続した「使役表現」に該当することが明らかになった。

第二に、被動化の後にも他動詞のままの場合を使役他動とした。韓国語の音声象徴語の派生様相で考察した結果、使役他動と使動は別の文の構造と意味を持つことが分かった。

最後に、本稿で論じ残した問題点をいくつか整理し将来の研究課題とする。

① 言語資料が、記述の簡便化のため、韓国語の形態的態と統辞的な態を日本語の他動詞化と使役表現と対照する時には日本語が基準になり、使役他動を考察する時には韓国語が基準になっている。韓日両言語の全般的な資料を対照整理すれば、より包括的な使動態の範疇関係が明らかになると考えられる。

② 韓国語の使動態を日本語へ受容することに焦点を合わせたため、文法モデルや用語が韓国語中心になっている。たとえば、韓国語の統辞的使動とは、実際は日本語の～ヨウニスルの形態までの範囲を包むと思われる。このような文法モデルと、被動-受身、使動-使役、接尾辞-助動詞などの用語問題には、韓日両言語で包括的な提案が必要である。

③ 韓国語の使動態の全般的な考察が対照を通じて行われているため、細部的な問題点に対する論理展開が不足している。十分な検討が必要な諸問題が本稿の各部分に提示のみされているので、今後の研究が望まれる。

【参考文献】

- 김문오(1997) 『국어 자타 양용동사의 의미구실 연구』 『國語學』 30
- (1996) 『양용동사와 사/피동 대비 연구』 『어문학』 7
- 김석득(1979) 『국어의 피사동』 『언어』 4-1
- 김인화(1989) 『국어 태 일반에 관한 소고』 『대학원논문집』 2 이화여자대학교 대학원
- 김차균(1980) 『국어의 수동과 사역의 의미』 『한글』 168
- 김한곤(1982) CAUSE as the Deep Semantic Source of So-Called "Causative" and "Passive" 『語學研究』 18-1
- 김형태(1999) 『16세기 말기 국어의 사동사 파생과 사동사의 변화 - 〈소학언해〉를 중심으로 -』 『한글』 243
- 류성기(1998) 『사동사의 제한적 범주와 입힘움직씨 설정』 『한글』 240,241
- 박양규(1978) 『使動과受動』 『國語學』 7
- 손호민(1978) 『긴 形과 짧은 形』 『語學研究』 14-2
- 송석중(1978a) 『使動文의 두 形式』 『언어』 3-2
- (1978b) Causes of Confusion in Description of Causatives in Korean,
Kim, Jinwoo(ed) *Papers in Korean Linguistics* Columbia : Hornbeam Press inc.
- (1980) Perception or Reality / Korean Causatives Reexamined,
Korean Linguistics 2

- 양동휘(1975) Semantic Constraints I 『語学研究』 11-2
 - (1979) 「국어의 피·사동」 『한글』 166
- 양인석(1974) Two Causative Forms in Korean 『語学研究』 10-1
 - (1975) Lexical Causations in Korean 『語学研究』 11-1
 - (1976) Semantics of Korean Causation *Foundation of Language* 4-1
- 이남순(1984) 「사동과 피동의 문형」 『國語學』 13
- 이상억(1970) 「國語의 使動·被動構文研究」 『語学研究』 26
 - (1972) 「動詞의 特性에 對한 理解」 『語学研究』 8-2
 - (1980) 「使動·被動語幹形成에 대한 多角的 考察」 『語文論集』 21
- 이익섭, 임홍빈(1986) 『國語文法論』 学研社
- 이정민(1974) *Abstract Syntax and Korean with Reference to English* 범한서적
- 임홍빈(1978) 「國語被動化의 意味」 『震檀學報』 45
- 최현배(1987) 『우리 말본』 정음문화사
- Shibatani, M. (1973) Lexical versus Periphrastic Causatives in Korean,
Journal of Linguistics 9
- 李文子(1979) 「朝鮮語의 受身と日本語의 受身(その1)」 『朝鮮學報第』 91
- 鄭秀賢(1987) 「現代日本語と韓國語의 受身·使役表現」 『論集日本語研究(一)現代編』
- 丁一榮(1985) 「韓·日兩言語における「態」의 比較研究」 『韓日比較文化研究』 1
- 大村益夫(1979) 「日本語·朝鮮語의 表現について-受身と使役-」 『講座日本語教育』 15
- 奥津敬一郎(1967) 「自動化·他動化および兩極化転形-自·他動詞の対応-」 『國語學』 70
- 影山太郎(2002) 「動詞意味論を超えて」 『言語』 31-12
- 金谷武洋(2002) 「日本語に主語はいらない」 講談社
- 國語學會(編)(1977) 『國語學大辭典』 東京堂出版
- 田中春美 ほか(編)(1988) 『現代言語學辭典』 成美堂